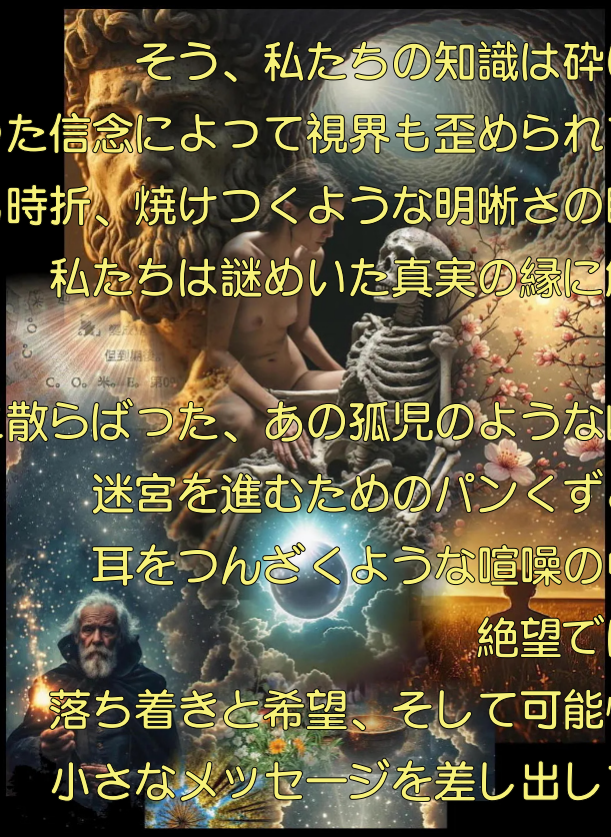
『灰から粘土へ――瓦礫の中の神話』

IV.　真実の断片



そう、私たちの知識は砕け散り、
偏った信念によって視界も歪められている。
それでも時折、焼けつくような明晰さの瞬間に、
私たちは謎めいた真実の縁に触れる。

混沌の中に散らばった、あの孤児のような断片は、
迷宮を進むためのパンくずとなる。
耳をつんざくような喧噪の中から、
絶望ではなく、
落ち着きと希望、そして可能性を語る
小さなメッセージを差し出している。

ティンの顔にかすかな緊張の線が浮かんだ。彼女は眉をひそめながら先ほどの詩を見つめ、それから顔を上げた。　「え？ どうしてこの作者は、文明をまるで瓦礫のように語るの？ ちょっと皮肉が過ぎるんじゃない？」

玲亜はただ静かに息を吸い、視線を部屋の向こう、目には見えない地平線へと漂わせた。「結局は、物の見方の問題よ、ティン」と、彼女はつぶやいた。「十分に遠くまでズームアウトしてみれば、大聖堂も、回路も、夢も――すべて塵へと崩れていく。」少しの間を置いて、彼女は静かに続けた。　「だから、落胆する必要なんてない。これが人生の、美しくも苛烈なリズムなのよ。アルファはやがてオメガに口づけする。灰は別の姿へと変わり、粘土になる。私たちはいつだって、円環を一周して元の場所へ戻ってくる。宇宙は嘆き悲しむわけじゃない。ただ、形を変えていくのよ。」

部屋の反対側では、アンドレイが物思いに沈みながら座っていた。その手は、古いマホガニーの傷だらけのテーブルに、静かに置かれていた。「それでも僕たちは、朽ち果てるものを超えて残る意味を渇望しているんじゃないか？」　彼は低く、落ち着いた声で口を挟んだ。「僕たちは、エントロピーを生き延びるために物語を作り出す。混沌の中でよろめきながら進むとき、つかまっていられる一本の黄金の糸を、必死になって求めているんじゃないのか？　だからこそ、人間は絶えず神話を紡ぎ出すんじゃないか。僕たちは物語を語る動物だ。けれど、その物語をまったく語らないかもしれない宇宙の中に、僕たちは閉じ込められているん

開示：　この作品はAIツールを使用して部分的に生成され、人間の編集が加えられています。

- T Newfields（和訳：吉田典子）
2011 静岡市　　2026年 静岡市